

地域におけるホームタウンスポーツの役割に関する研究

- 東京都町田市のサッカーを事例として -

A Study on Hometown Sports' Contribution to the City and the Community

- A Case of Football in Machida city, Tokyo -

齋藤 弘樹* ・ 川原 晋**

Hiroki Saito

Susumu Kawahara

摘要

地域振興とスポーツ普及を一体として考える「ホームタウンスポーツ」が地域に果たす役割を考察するため、少年サッカーの普及を母体として設立されたプロクラブを有するという特徴を持つ東京都町田市のサッカーを事例として、次のことを明らかにした。まず、町田市の少年サッカーは、地域社会教育の一環として小学校教員や保護者等の地域コミュニティが支えて普及したこと、その指導者やOBを母体としてプロクラブFC 町田ゼルビアが設立されたことで関係者に基本的理念が共有されている強み生かし、少年サッカーと共に、①子どもの教育の場の役割、②子どもの夢や目標を創出する役割、③地域の賑わいを創出する役割を果たしてきたことである。また、今後はそれらに加え、④地域コミュニティの再構築や郷土意識の醸成の役割への期待を受けていることも明らかになった。最後に、これまでに蓄積された潜在的な人材や運営経験等を明らかにした上で、町田市ならではの「ホームタウンスポーツ」形成の方策を提言した。

1. はじめに

1.1 研究の背景と目的

近年、我が国の様々なプロスポーツの活動・存続基盤が企業から地域へと移行している。その先駆的な存在であるサッカーのプロリーグJリーグでは、クラブの本拠地を「ホームタウン」と呼び、クラブはホームタウンと定めた地域と一体となった活動を行うことが規定されている。実際、2010年3月現在、40都道府県で92のJリーグチームがホームタウンを拠点とした活動を行っている。このような「ホームタウン制」を採用するスポーツは他にも増えつつある。そのねらいは、スポーツチームは地域の自治体や企業などと連携し、様々な地域貢献活動をしながらその競技の普及に努めることであり、またホームタウンである都市は、ホームタウンチームと協働でスポーツを活かしたまちづくりを行うことで、地域振興を目指していることで

ある。一般的に、スポーツチームのホームタウンとなることで、地域知名度の上昇、地域経済の活性化、地域住民の余暇の充実などの地域振興の効果が地域にもたらされると言われている（傍士 2010）。

しかし、ひとことでホームタウンといっても、地域の特性や歴史、またその地域におけるホームタウンスポーツの普及経緯やホームタウンチームの活動理念などは異なり、地域におけるスポーツの位置づけは様々である。そのため、ホームタウンスポーツを活かしたまちづくりを効果的に進めるにあたっては、そのスポーツが地域、あるいは地域住民にとってどのような存在であるかを十分に理解することが重要である。

そこで、本研究は、特に、地域の歴史とその地でのホームタウンスポーツの歴史との関係が深いと考えられる、少年スポーツに起源をもつホームタウンスポーツの事例として、東京都町田市のサッカーを対象とする。そして、サッカーと地域コミュニティの関係や、地域振興に果たしてきた役割を明らかにすることで、地域振興とスポーツ普及を一体で考える「ホームタウン形成」のあり方を提言することを目的とする。

* 町田市役所

** 首都大学東京都環境科学研究科観光科学域
〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1(新 10 号館)
e-mail: ssm.kawahara@me.com

1.2 対象地の概要

町田市は、東京都の多摩南部地域に位置する市で、1960年代に東京都心のベッドタウンとして発展した都市である（図1）。現在は百貨店やショッピングモールが並ぶ商業都市であるとともに、郊外に私立大学が点在するなど青年の街としての性質を併せ持っている。早くからスポーツが盛んな地域であり、特に少年サッカーにおいては全国トップクラスの実績を誇り、「少年サッカーのまち」として認知されていた。また、その少年サッカーが起源となった地元クラブチーム「FC町田ゼルビア」が2011年12月にJ2昇格を果たしたこともあり、サッカーを活かした地域振興の期待が高まっている地域である。



図1 東京都における町田市の位置

1.3 研究の方法と本稿の構成

本研究を進めるにあたっては、サッカー現場関係者へのヒアリング調査ならびに文献調査を行った。なお、ヒアリング調査は町田市でサッカーの普及に中心的に携わってきた表1の5名に対し、共通質問と個別質問により聞き取りを実施した。

表1 ヒアリング調査対象者ならびに質問項目

対象者	主な共通質問項目
1 少年サッカー指導者	○町田市にサッカーが普及した要因 ○町田市のサッカーが多くの実績を残してきた要因 ○サッカーを取り巻く環境の変化 ○サッカーの普及期から現在に受け継がれているもの ○町田市のサッカーの現状・課題
2 FC町田ゼルビア代表 (元少年サッカー指導者)	
3 少年サッカー指導者 (東京都サッカー協会技術委員)	
4 少年サッカー指導者 (東京都サッカー協会技術委員)	
5 FC町田ゼルビア指導者 (元少年サッカー指導者)	

本稿の構成は、2章で町田市の少年サッカーが普及し、競技人口として最盛期に至るまで経緯と要因を明らかにし、3章で1980年代以降の地域社会等の変化の中で競技人口が減少し、指導・運営体制が変遷していく状況を明らかにする。さらに4章では、そうしたな

かで、市内にプロサッカークラブが立ち上がる経緯を明らかにする。2～4章のホームタウンスポーツの目標のひとつであるスポーツ普及の視点に対して、5章では、もう一つの目標である地域づくりの視点から町田市のサッカーの現状を明らかにし、6章で総括する。

II. 町田市における少年サッカー普及の経緯

2.1 普及の背景としての大規模団地群の建設

町田市は1958年に1町3村の合併で誕生した市で、当時の人口は約6万人、農地の割合が高い地域であったが、1960年代に入ると、市内で国の主導による大規模団地の建設が相次いで行われ、急速な都市化を余儀なくされるなど、地域に様々な影響が生じることとなった。サッカーの普及に関わるものとしては以下の2点があげられる。

(1) 子どもを中心とした人口の急増

相次ぐ大規模団地の建設に伴い人口が急増、1970年時点で人口は約18万人にも昇り、市制開始後わずか10年余りで3倍にも膨れ上がった。特に子どもの増加が著しく、1960年代から1970年代には児童数が約3倍に膨れ上がった。それに伴い、市内の小中学校数は10年でほぼ倍増した（図2）。

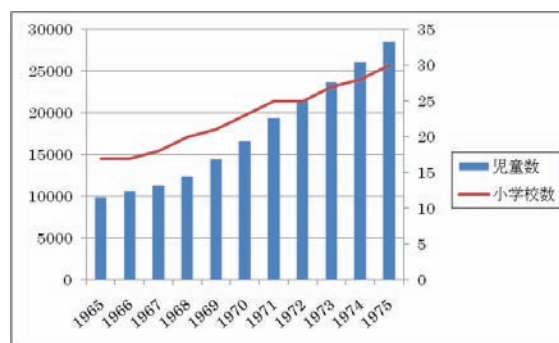


図2 年度別市内児童数・小学校数の推移

(2) 地域のコミュニティ意識の高まり

行政は団地建設に伴う急激な都市化への対応に追われた結果、行政機能が一時的に低下し、行政主導の市政運営を進めることができなくなった。町田市(2008)によれば、そういった状況が、地域住民に、各地域で抱える課題に対し、地域のなかで率先して取り組もうという意識が生まれ、それが地域コミュニティの強化につながったとされている。

2.2 小学校教員が担った少年サッカーの普及

町田市におけるサッカーの普及は、小学校教員が中

心となって広めていった少年サッカーに大きな特徴がある。町田サッカー協会主催による市内で初めての少年サッカーの大会が開催されたのは1969年であり、大会に合わせて結成された小学校の5つの学級チームが参加した。以後、毎年、子どもの日に開催されることとなったこの大会をきっかけに、少しずつ市内に少年サッカーが広まり始めた。

関係者ヒアリングおよび町田市サッカー協会創立記念誌（1983, 1987, 1997）から、町田市の少年サッカーが普及した要因は以下の3点に整理できる。

第一に、当時、市内の小学校では、「ボールひとつで誰でも楽しめる」「体力が付き、他のスポーツをするうえで役に立つ」などの理由から、体育の授業でサッカーが積極的に取り入れられた。このため、町田市内の子ども達にとってサッカーは身近なスポーツとなっていたことである。

第二に、子ども達からの放課後もサッカーをしたいという要望を受け、小学校教員自らが各地で少年サッカーチームを立ち上げると共に、自らのサッカー指導者として知識や技術の向上を目指して、市内教員によるサッカーチームが結成されたことである。教員チームは社会人大会に出場し、合同合宿を行うなど、市全体の教員が熱意を持ってサッカーに取り組んだ。

第三に、小学校の教員が直接の指導者であることで、町田市の少年サッカーの設立時の理念と掲げた「少年サッカーは地域における子どもの社会教育の場である」ということが、実際的にも、保護者に認知され、安心感を与えていたことである。

これらの要因により、町田市の少年サッカーは小学校教員とそれを支える地域の地域社会に支えられて急速に普及し、最初の少年サッカーチームが結成されてからわずか10年足らずの期間で、東京都内で最も少年サッカーチームが多い地域となった。

2.3 競技が活性化した要因

町田市の少年サッカーは早くから全国大会で優勝するなどの実績を残している。その背景として、指導者達の熱心な指導があったのは前述のとおりであるが、その他、関係者へのヒアリング調査のなかで以下の2点が要因としてあげられた。

(1) 市内リーグ戦の開催

1つ目は、全国の他地域に先駆けて、1974年に市内の小学生チームによるリーグ戦が始まったことである。

当時他の地域では対外試合はほとんど行われてい

なかったが、初年度は18チームが参加、そのわずか3年後には32チームが参加し2部制になるなど、急速に発展していった。リーグ戦を通して選手が多くの実験を経験を積むことができるようになったことに加え、指導者、選手それぞれが市内の他チームに対してのライバル意識が高まり、市内の競技レベルの向上につながった。

(2) 市内選抜チームFC町田の結成と活躍

2つ目は、1978年に市内の少年サッカー各チームから選抜された選手で組織される「FC町田」が結成され、週1回のより高いレベルのトレーニングを行う「FC町田トレーニングセンター」が運営されたことと、様々な市外の大会に参加する機会が用意されたことである。このことによって、特定の強豪チームだけでなく、町田市のチーム全体の技術の底上げが図られた。

この選抜チームであるFC町田は1982年まで、全日本少年サッカー大会における優勝1回、準優勝2回を始め、東京都予選で常に上位に位置する数多くの実績を残した（表2）。そのためFC町田の存在が子ども達にとっての憧れであり目標となるとともに、指導者達にとっても選手をFC町田に送り出すことが大きなモ

表2 全国少年サッカー大会東京都予選結果

年度	優勝	準優勝	3位
2011年	横河武蔵野FCJr	白百合SC	ヴェルディJr
2010年	JACPA東京	ヴァーロSCイースト	府ロクSC
2009年	横河武蔵野FCJr	町田JFC	ヴェルディJr
2008年	ヴェルディJr	パディSC	三菱養和SC奥鴨
2007年	ヴェルディJr	キンダー普光SC	パディSC
2006年	ヴェルディJr	横河武蔵野FCJr	町田JFC
2005年	ヴェルディJr	横河武蔵野FCJr	すみだFC
2004年	ヴェルディJr	町田JFC	三菱養和奥鴨
2003年	小柳小まむし坂SC	つくし野SSS	横河武蔵野FCJr
2002年	横河FCJr	柏レイナル青梅	FC多摩川Jr
2001年	ヴェルディJr	FC明成	小柳小まむし坂SC
2000年	ヴェルディJr	パディSC	梨花FC
1999年	ヴェルディJr	パディSC	
1998年	読売SCJr	三菱養和調布SS	光が丘第四
1997年	CYD.FC	町田JFC	
1996年	東大和サッカー少年団	読売SCJr	
1995年	府ロクSC	高島平SC	
1994年	FC小平ウェストスター	創価ロケットSC	
1993年	読売SCユース	府中第四フлакキラスSC	町田JFC
1992年	読売SCユース	白百合SC	
1991年	府ロクSC	わらごま精心SC	
1990年	陶館サッカー少年団	映星小サッカー部	
1989年	高島平SC	読売SCユース	(ゼルビア設立)
1988年	読売SCユース	富士見丘少年蹴球団	
1987年	町田小川FC	キタミ80FC	忠生サッカークラブ
1986年	府ロクSC	富士見丘少年蹴球団	
1985年	東大和サッカー少年団	富士見丘少年蹴球団	
1984年	町田SSS	鹿西レグルス	
1983年	府ロクSC	富士見丘少年蹴球団	(FC町田出場見合せ)
1982年	富士見丘少年蹴球団	FC町田	
1981年	FC町田	府ロクSC	
1980年	鹿西レグルス	梨花SC	FC町田
1979年	FC町田	富士見丘少年蹴球団	
1978年	FC町田	府ロクSC	
1977年	町田SSS	映星7スターJr	境川スポーツ少年団
1976年	府ロクSC	三菱養和SC	町田SSS
1975年	町田SSS	境川スポーツ少年団	
1974年	町田SSS	上石神井SC	

町田市の少年サッカーチーム

チベーションとなり、市全体の競技の活性化にもつながった。なお、選抜チームの出場自粛を求められ、FC町田は全日本少年サッカー大会への参加を1983年から見合わせる事となり、また、1991年のJリーグ発足後はその下部組織の強豪チームが台頭する。このことにより、一般少年サッカーチームの子ども達や指導者は大きな目標を失い、次第に町田市のチームの成績低迷を招いたと関係者は指摘した。

Ⅲ. 町田市少年サッカーの環境と運営の変遷

3.1 大規模団地建設期以降の地域社会の変化

1980年代以降は、1960～70年代にかけての大規模団地建設が一段落したものの、その後、町田市少年サッカーの母体となっていた小学校や地域コミュニティの環境は変化し(町田市(2003))、少年サッカー人口や運営体制にも影響を与えることになる。本章ではこれを明らかにする。

町田市のサッカーに影響を与えたこの時期の地域社会の変化としては大きく以下の2点があげられる。

(1) 少子化の始まり

著しい増加を続けていた児童数も1980年をピークに減少し始めた。1980年には36,767人だった市内の児童数は、2000年には18,675人にまで減少し、市内各地で小学校の統廃合が進められた。

(2) 地域における活動主体のテーマコミュニティ化

1980年代以降は、市民意識や地域活動が、急激な団地建設に対応した身近な生活環境の最低限の確保といった緊急的テーマから、生活の質の向上に興味が行った。また、この時期は、団地建設期に転入してきた子ども達が成人を迎え市外に転出する一方、新たに30代後半から40代の人達が転入するなど市民の転入・転出が激しい期間にも重なり、そうした意識変化の中で新規住民の町内会自治会へ新規参加が進まず、加入世帯数も年々減少した。

こうしたことから、市民活動の主体として、地域の町内会・自治会が弱まる一方で、興味・趣味の一致するグループに移り、新たなコミュニティの形としていわゆるテーマコミュニティの普及が進んだ。

1990年代に入ると、特定非営利活動促進法(通称NPO法)が施行され、地域を支える活動等の主体の多くがNPO法人化していった。

3.2 少年サッカー運営主体の変遷

関係者へのヒアリング調査から、こうした地域社会の変化のなかで、町田市の少年サッカーの運営主体も様々に移り変わってきたことが明らかになった。

普及当初は教員が中心となって、チームを設立し運営をしてきたが、1980年代になると、運営者が教員から選手の保護者になるチームが増加した。これは、教員は定期的に転勤を余儀なくされるため、同じ小学校において継続してチームに携わることが困難になるためである。

その後、保護者による運営も、仕事との両立の難しさや指導者の年齢の問題などもあり、一部のチームで、大学生となったチーム選手OBがコーチとしてチームへ戻るサイクルが生まれはじめる。そして、市全域的に、徐々に運営主体がチームOB中心へと移り変わった。ただし、チームOBは大学生が中心であり、大学を卒業するとともに辞めて次のチームOBに引き継ぐケースが最も多い。中には地元企業に勤めるなどして、社会人になってからも続ける人がいるものの、保護者による指導者と同様、仕事をしながらのチーム運営は困難が伴う。

さらに、指導者が小学校教員から保護者有志、OB有志と変化し、また、町内会等の地域コミュニティとの関係も薄まる中で、近年は運営スタッフの業務が以前より多岐に渡るようになり、チーム運営がより困難なものへ変化してきたという。例えば、運営スタッフの確保やグラウンドの確保や試合日程の調整、さらに以前は選手の保護者が行っていた選手の送迎や食事の発注などである。

こういった流れを受け、2000年頃からは、市内のNPO組織に少年サッカーチームの運営を補助する活動がみられるようになった。チーム運営者にとっては、NPOの職員が運営補助に携わることで煩雑な運営業務を委託でき、かつ平日の人員不足も解消されるなど、負担を軽減させることにつながるため、運営を委託するチームが増えた。さらに近年は、NPO自らが運営するサッカーチームが増加傾向であり、NPO職員に対する給与の支給のために選手の月謝を上げる傾向にあるが、順調に選手数を増やしている。

その人気の要因は、NPOチームでは送迎や飲料の手配などの子ども達の身の回りのことを全てスタッフが言い、保護者の身体的負担がないという点が大きいという。近年、保護者は、金銭的な負担よりも身体的負担や保護者間の人間関係を敬遠する傾向にあり、こうしたニーズの変化が、NPOチームの普及に影響してい

ると言われている。

このような状況から、今後も NPO チームに子どもが集まり、保護者達が運営の手伝いする必要がある親や OB 選手によるボランティアチームはさらに厳しい運営を迫られることが予想されることがわかった。

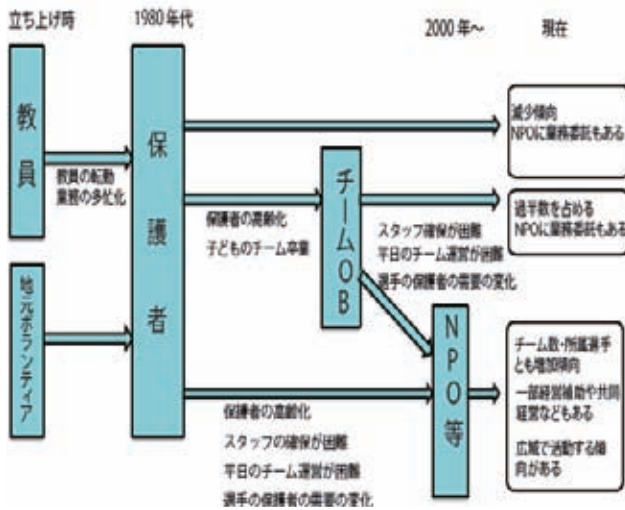


図4 町田市における少年サッカー運営主体の変遷

3.3 町田市の少年サッカーの運営

町田市の少年サッカーチームは、25 チーム（2010年3月現在）と、チーム数こそピーク時からさほど減少はしていないが、こうした、少年サッカーチームの運営が最盛期より厳しい状況になっている要因を指導者へのインタビューに基づき、3つに整理した。

(1) 絶対児童数の減少と市外チームへの流出

第一には、児童の絶対数が減少していることに加え、子ども達が横浜や川崎、東京などの周辺地域にあるJリーグクラブの下部組織チームへ流出していることである（図3）。これ

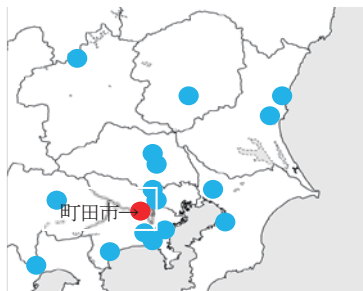


図3 Jリーグのホームタウン都市の分布

は、後述するように、地元でJリーグクラブチームの存在を期待する要因でもある。

(2) 指導者の不足

市内のまだ多くのチームでは選手の保護者やチームOBなどのボランティアによる運営形態で維持されている。ボランティアとして携わる人の多くは社会人や大学生であることから、恒常的にチーム運営に携わる人はほとんどおらず、運営における人員不足が問題

となっている。特に運営スタッフは平日の練習の際の人員確保が課題となっている。

(3) 練習施設の不足

市内のチームの大部分が小学校の校庭を中心に活動をしているが、少子化の影響を受け、2000年頃から市内各地で小学校の統廃合が相次いで行われたことにより、練習グラウンドが減少した。そのうえ、普及期に比べ小学校との結びつきも弱くなったため、優先的に校庭を使用することができなくなり、他の団体との調整が必要となるなど、チーム増加期に比べて練習グラウンドの確保が困難な状況となっている。

3.4 小活

本章から、子ども達の市外サッカークラブへの流出やNPO法人によるサッカークラブ運営など、少年サッカーにおける地域性の薄まりが、変化の特徴であることがわかった。これは、子ども達にとっては、地域にとらわれず、目的や好みなどによるチーム選びが可能になり、選択肢が広がったという考え方もできるので、決してデメリットばかりではない。近年では、平日は市外のサッカースクールに通い、週末に地元のサッカーチームで活動する子どもは珍しくない。ただ一方で課題となるのは、普及期の活動理念である、「子ども達の社会教育」としての少年サッカーを支える環境、すなわち小学校と地域コミュニティを中心として子ども達を支える環境が失われつつあることである。

IV. 市内プロサッカークラブの誕生と少年サッカーとの関係

4.1 少年サッカーを起源としたクラブ

FC町田ゼルビアは、町田市をホームタウンとするサッカークラブで、1989年に市の少年サッカー指導者達の手で設立された。1991年から東京都社会人リーグに参加し、2009年よりアマチュアリーグ最高峰の日本フットボールリーグ（通称JFL）に所属、そして2011年12月にJ2昇格を果たした。Jリーグに所属するクラブのほとんどは企業チームが母体となって作られたのに対し、このFC町田ゼルビアは企業が母体とならずに地域で作りに上げたチームという点で特徴的である。具体的には、1977年に少年サッカーの市内選抜チームとして設立されたFC町田を起源として、FC町田で活躍した選手が卒業後も活動できる場を作ろうという考えのもとで、中学世代のFC町田ジュニアユース、さらに

高校世代のFC町田ユースが順に結成されていった。FC町田ゼルビアはこうした一連の流れの中で誕生したクラブチームである（図5）。

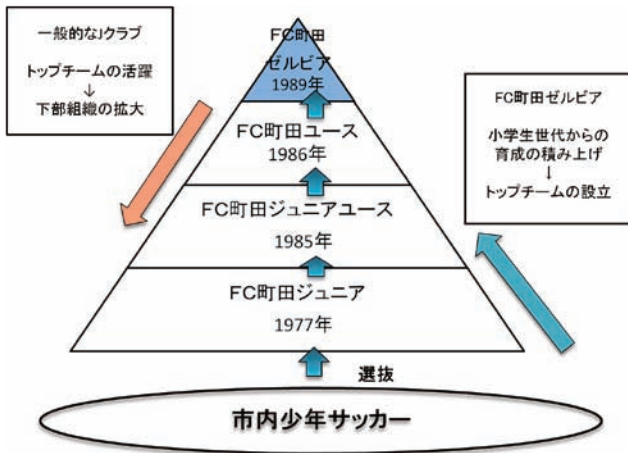


図5 FC町田ゼルビア設立のプロセス

4.2 設立目的と地域貢献活動

(1) 設立目的

FC町田ゼルビアの設立に携わった複数の少年サッカー指導者へのインタビューから、設立の目的は次の3つである。第一には、地域住民にとって誇りとなるトップチームを作ることによって市民の郷土意識を呼び起こすことである。これは、前章で述べたような、選抜チームの活動が弱体化したことによる少年サッカーの技術レベルの停滞や、地域とチームの結びつきの希薄化、当初少年サッカーを支えてきた地域コミュニティの弱体化へといったことへ危機感が背景にあったことがわかった。第二には、町田市市の少年サッカー出身者が全国各地のプロクラブで活躍していたことである。Jリーグに参加するようなトップチームを市内につくることで、少年サッカーで育った選手達が地元で活躍できる場を作り、地域の盛り上がりや、少年サッカーの復興につなげたいというねらいがあった。

(2) 郷土意識と子どもの教育を意識した地域貢献活動

こうした目的を持ってトップチームFC町田ゼルビアは創設されたため、設立当初から様々な地域貢献活動を行ってきた。現在も毎年実施されている町田市出身の選手を集めて行われるサッカーフェスティバルは、Jリーグ開幕前から行われており、当時は前例のないイベントと言われていた。近年活動内容はサッカーだけに留まらず、商店街主催の祭り等の各種地域イベントへの参加や、高齢者の介護予防事業、幼児への絵本の読み聞かせ会など、様々な地域や世代に対しての交

流活動を続けている。また、自治体の事業にも協力しており、産業祭やさくら祭りなどのイベントやリユース活動への呼びかけなどに積極的に参加している。このような活動を通じて、市民との距離を縮めるとともに、地域の賑わいや一体感を創出しようと努めている。

また、FC町田ゼルビアは、少年サッカーの指導者が中心となって設立したこともあり、サッカーを通じて青少年の育成に寄与するという少年サッカーと共通の理念を持ち、活動していることがわかった。選手の小学校訪問を中心に子ども達との交流の場を作ることに力を入れている。巡回サッカー指導やスポーツ大会への参加に加え、選手自らが教壇に立って授業を行うなど、その取り組み内容は多岐に渡っている。

アプローチの仕方は違うものの、少年サッカー同様に青少年の育成に貢献しようという活動がある。

4.3 サッカー環境整備に対する考えの相違

少年サッカーを土台として設立され、順調に発展を遂げてきたFC町田ゼルビアであるが、一方でクラブの発展が少年サッカーの発展には結び付いていない現実があることもわかった。

クラブ関係者は、FC町田ゼルビアが活躍することで、地域のサッカーの競技人口が増加や地域のスポーツ施設の整備が進むことなどが想定され、それが少年サッカーの発展につながるという長期的なビジョンを持って活動をしている。それに対し、少年サッカー関係者は、現在の少年サッカーの衰退状況を踏まえ、より即効性のある対策が必要であると考えている。まず、子ども達がサッカーをしやすい施設整備や環境を整えることで、少年サッカーの衰退を食い止めることを最優先に考え、それが、以前のような有望な選手やサポーターを地域から輩出される環境づくりにつながるため、

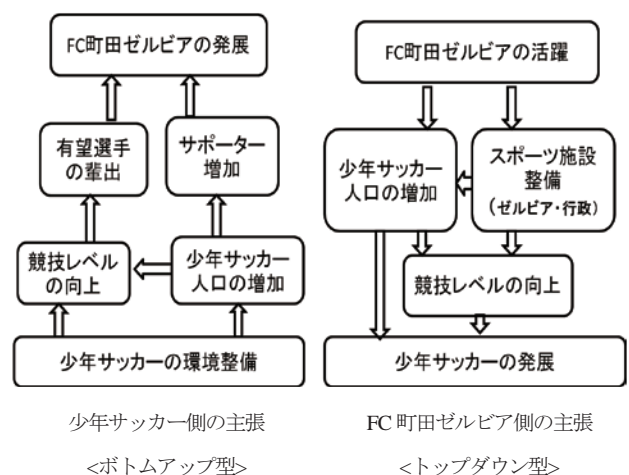


図6 サッカー環境整備に向けた考え方の違い

結果として FC 町田ゼルビアの発展につながるものであるという考えである。FC 町田ゼルビア経営者側と少年サッカー運営者側は、双方が支えあう関係を目指す点は共通しているものの、これまでのボトムアップ型の普及理念を重視する少年サッカー側と長期的なまちづくりの視点を持って活動する FC 町田ゼルビア側の見解に相違が見受けられることがわかった (図 6)。

4.4 小括

もともと子どもの社会教育の一環として広まった町田市の少年サッカーは、選抜チーム FC 町田が全国大会で活躍をしていた時期を中心として、子ども達の夢の創出や地域の賑わいづくりにまで影響を与えてきた。その後、少年サッカーは競技人口の減少や成績の低迷のため影響力は低下したものの、これを引き継ぐようにプロクラブ FC 町田ゼルビアが誕生し活動を行い、クラブの知名度の上昇とともにその効果も大きくなっていることがわかった (図 7)。ただ、FC 町田ゼルビアの運営者と少年サッカー指導者とは、地域社会や青少年育成に対するアプローチや考え方に相違があることもわかった。

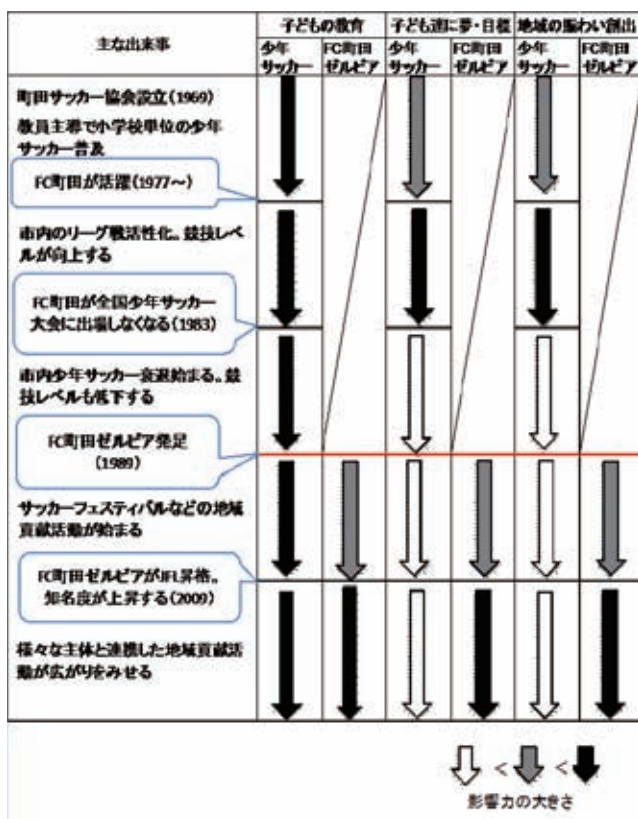


図 7 サッカーが果たしてきた役割と担い手

V. 地域づくりにつながるコミュニティ形成面からみた町田のサッカーの現状と課題

町田市のサッカーは、少年サッカーの普及時の理念や、FC 町田ゼルビアの設立理念からわかるように、Jリーグがめざす地域づくりとスポーツ普及を一体で考える「ホームタウンスポーツ」となることがサッカー関係者から期待されている。このことは、町田市のスポーツ振興計画をみると、特に、地域コミュニティ形成の面から、行政からも期待されていることがわかる。そこで、本章では、市のスポーツ振興計画で掲げられた「2つのスポーツコミュニティ」の枠組みを借りて、町田市のサッカーの現状をコミュニティ形成の点に着目して評価する。

5.1 町田市スポーツ振興計画にみるスポーツと地域との関係

町田市では 2009 年にスポーツ振興計画を策定し、「スポーツで人とまちが一つになる」を基本理念として、その実現のために「スポーツコミュニティの形成」と「各主体間の協働体制の構築」を進めることとしている。そしてスポーツコミュニティについては、「都市・テーマ型スポーツコミュニティ」と「地域型スポーツコミュニティ」の 2つを定義している。「都市・テーマ型スポーツコミュニティ」は、地域、市域の枠を越えてスポーツに関わるコミュニティであり、FC 町田ゼルビアのようなホームタウンチームを核として広域な交流の輪を広げ、地域振興につながることを期待されている。また、「地域型スポーツコミュニティ」は、少年サッカーのように身近な場所でスポーツを楽しむコミュニティであり、町内会自治会以外の、地域の課題を解決するような新しいコミュニティの形成につながることを期待されている。

5.2 FC 町田ゼルビアによる「都市・テーマ型スポーツコミュニティ」形成の現状

FC 町田ゼルビアは現在、ホームタウンチームとして都市・テーマ型スポーツコミュニティの形成の核となる活動を続け一定の成果をあげていることが、運営組織代表者や指導者へのヒアリングと、同組織の発信する各種メディアからわかった。

(1) スタジアム観戦による交流拡大の実績： FC 町田ゼルビアは、2010 年度のシーズンにおいて、Jリーグ昇格条件である 1 試合平均 3,000 人を上回るホーム

スタジアム観戦者数を記録した。また、観戦者の他に、ボランティアスタッフや屋台村を形成する市内外の店舗、大学チアリーディングなどの他のスポーツ団体など、スタジアムは様々な人達が集まる場となっている。またクラブ側も、試合後に子ども達を対象としたサッカー教室を開催するなど、大人から子どもまで楽しめる空間づくりに努めている。

また、このようなスタジアムでの集客から人々の交流が生まれたのは、かつての少年サッカー経験者が、試合観戦、子どものサッカー教室、ボランティアなどで再会していることが大きな要因である。それぞれ目的や動機は違うものの、試合後にはクラブ関係者も含めての交流を楽しむ場が自然とできあがっている。これは、少年サッカーの実績の積み重ねでクラブを作ったことによる効果であると考えられる。

(2) 連携事業による地域振興の実績： 2010年シーズンにおいて、FC町田ゼルビアにはJリーグ昇格前のクラブとしては異例の約200社もの企業がスポンサーとなっている。契約内容は試合放映やサポーターへの割引サービス、さらにはリユース活動協力など多岐に渡る。また、全国で初めて商店会連合会と提携し、連合会が普及を進めている地域通貨「すき・まちポイント」の機能をサポータークラブ会員証に付与する仕組みをつくるなど、地域とクラブの協力体制を深める取り組みを進めている。また、主体間のつながりを生むきっかけとして、定期的にスポンサー交流会を実施している。市内外を問わず、企業の規模、業種など様々な団体が一同に集う場として、新たな交流を生む場として好評を得ているという。

(3) 課題： これまでのクラブの活躍や地域貢献活動などからFC町田ゼルビアの知名度が上昇してきたこともあり、今後も様々な主体との連携事業は増加することが予想される。クラブ関係者によれば、事業数の増加にともない、クラブ側の負担も増加しているという。今後は持続可能な関係構築を目指して事業の効率化を図り、より効果的に地域振興につながる事業計画を検討する仕組みを構築することが求められている。

5.3 少年サッカーによる「地域型スポーツコミュニティ」形成の現状

一方、町田市の少年サッカーは概ね小学校の学区単位ごとの地域で普及し、周辺住民の支えのなかで普及していった経緯があり、地域スポーツコミュニティのひとつであったといえる。しかし、3章で述べたように、現在は、少年サッカーチームと地域の関係は薄

れてきており、「地域型スポーツコミュニティ」の形成を改めて目指すならば、再構築が必要である。保護者やOBの運営によるチームから、NPOによる運営などの推移を勘案しながら、より地域に根差した運営形態にするといった工夫が必要である。関係者の話によれば、従来のような小学生、中学生といった世代別のチーム運営から、地域の様々な世代を取り込む多世代型のチーム運営形態へ転換することが、地域と再び結びつき、選手不足や指導者不足といった課題をも解決する可能性が指摘された。

5.4 小活

以上のように、「都市・テーマ型スポーツコミュニティ」形成の面ではFC町田ゼルビアを核として成果が上がりつつあるのに対して、「地域型スポーツコミュニティ」形成の面では、課題が多く実現に向けてのアイデア段階であることが分かった。

VI. まとめ：ホームタウンスポーツの理念の実現化に向けて

6.1 町田市のサッカーが果たした役割と期待

本稿で示してきたように、少年サッカーからプロクラブまでの広がりを持つ町田市のサッカーは、時期によってその大小はあるが、①地域における子どもの社会教育の場の提供、②子どもの夢や目標の創出、③地域活力の創出、という3つの役割を果たしてきたことがわかった。そして、ホームタウンチームの存在を活かした地域づくりについて、特に地域レベルの新たなコミュニティ形成への期待が大きいことがわかった。

6.2 蓄積を活かしたホームタウンスポーツ実現に向けて

さらに、本稿で示してきた町田市のサッカーの普及過程や、人材や経験の蓄積、直面している課題は、地域振興やコミュニティ形成といった地域づくりとスポーツ普及を一体的に進める「ホームタウンスポーツ」の理念を実現化していくのに多くの示唆を与えると考えられる。この点から見ると、町田市のサッカーの蓄積としては次の3点があることがわかった。

第一には、選手や指導者、チーム運営者といった経験者が多いという人材の蓄積である。普及当初から都内最多のチーム数を誇るほどの競技人口があり、選手としてだけでなく、時代変遷のなかでの地域主体か

ら NPO 等との連携までの多様なチーム運営を経験してきた人も多く存在する。

第二には、ボトムアップ型の普及による、地域のスポーツからプロクラブまでのサッカー普及理念の一貫性と継続性である。日本の大部分のプロクラブを有する都市でのサッカーの普及はトップダウン型であるのが一般的ななかで、この点は特徴的である。

第三には、プロクラブを核とした多様な地域コミュニティや事業者との連携による地域振興の実績である。

こうした蓄積を活かして、サッカー関係者や行政からの期待も大きい一方で課題も多い「スポーツを通じた地域レベルの新たなコミュニティ形成」につなげていくことが、「ホームタウンスポーツ」の実現には、まず必要であろう。それには、(1) 潜在的人材の活用につながる参加しやすいスポーツ環境づくりや、(2) 少年サッカーのような地域スポーツからプロクラブまでの理念の一貫性や継続性を生かした、世代を超えたスポーツ環境づくりが考えられる。これらは、文部科学省が進めている地域スポーツ振興施策である「総合型地域スポーツクラブ」¹ 施策など、既存の施策なども活用しながら、多様なチーム運営を経験してきた蓄積を活かして地域住民、チーム運営者、行政等が協働で検討していくべきであろう。

また、プロクラブを核とした多様な地域コミュニティや事業者との連携による地域振興を、各主体が過剰な負担を抱えることなく継続的に発展させるための仕掛けが必要である。多様な主体が担い手となれるよう事業の企画プロセスや評価の工夫などが求められる。

また、町田市は、「子どもの社会教育からホームタウンチームがつくられた環境のあるまち」ということをまちの特徴としてもアピールし、他都市との差別化を図ることも可能であろう。

このように、ホームタウンスポーツは、その都市のスポーツ環境の歴史や現状を踏まえながら、地域におけるスポーツの役割を多様に捉えることで、具体的な地域づくりとスポーツ普及の形が具体化できよう。

今後も、スポーツ振興、地域振興、コミュニティ施策、都市ブランド戦略といった様々な政策的アプローチで地域におけるホームタウンスポーツの役割を考察していきたい。

謝辞)

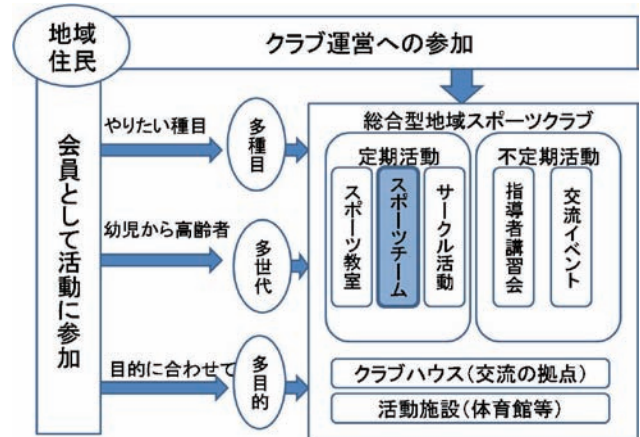
首都大学東京大学院における派遣研修では、非常に有意義な時間を過ごすことができました。指導教官として多岐にわたりご指導くださいました川原先生を始め、観光科学域の諸先生、学生の皆さんにこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

また、本研究に当たっては、町田市の少年サッカー指導者の方々ならびに FC 町田ゼルビア関係者の皆様にヒアリング調査のご協力をいただきました。ご多忙中にも関わらず丁寧なご対応をいただきまして、本当にありがとうございました。

最後になりましたが、町田市長を始め、町田市役所職員の皆様、そして何より町田市民の皆様の本研修に対する深いご理解の下に、このような貴重な機会をいただきましたことに心より感謝申し上げます。

注)

1 「総合型地域スポーツクラブ」は、地域住民が各自の興味関心・競技レベルに合わせて、さまざまなスポーツに触れる機会を提供する地域密着型のスポーツクラブである。クラブの設置から運営までを地域住民自らが行っていくことを想定している。



総合型地域スポーツクラブのモデル (文部科学省)

参考文献)

- 傍士銃太(2010)：「ホームタウンと地域の未来」, 地域開発 vol. 554
- 東京都サッカー協会(1997)：東京都サッカー協会五十年史
- 東京都市長会(2010)：地域力の向上に関する基礎調査報告書
- 町田市(2007)：新たな地域コミュニティの創成に関する調査研究
- 町田市(1970)：団地建設と市民生活ー団地白書
- 町田市(2003)：団地白書21
- 町田市(2009)：町田市スポーツ振興計画
- 町田市(2008)：町田市まちづくり 50 年史
- 町田サッカー協会(1983)：町田のサッカーⅢ 町田サッカー協会創立 15 周年記念誌
- 町田サッカー協会(1987)：町田のサッカーⅣ 町田サッカー協会創立 20 周年記念誌
- 町田サッカー協会(1997)：町田のサッカーⅤ 町田サッカー協会創立 30 周年記念誌
- 守屋実(2009)：FC 町田ゼルビアー20 年の軌跡ー1989~2009
- 日本体育・スポーツ経営学会(2002)：テキスト総合型地域スポーツクラブ